

漢語の分析

アルド・トリーニ (ヴェネツィア大学 イタリア)

Aldo Tollini (University of Venice - ITALY)

1. はじめに

文章理解には語彙の知識は重要な働きをする。語彙力には言葉の読み方と意味を理解する語彙の認識と未知の語彙を予測・推測する能力がある。語彙の類推力が読解に重要な役割を果たしていることはこれまでも指摘されているが、語彙の中でも特に分析が可能な漢語の果たす役割は大きいと言える。したがって、語彙の指導には漢語を分析するアプローチが有効だと思われる。漢語の分析にはいろいろな方法があるが、意味理解を目的にした場合、漢語の意味上の分析が適切であろう。

2. 漢語と分析

漢語は定着しにくい言葉であり、分析も非常に難しいと考えられている。本稿では漢字2字で構成されている熟語で、音読みで発音される2字漢語を分析の対象とした。漢語はさまざまな観点から分析することができる。歴史的に漢語がどのように発展していったかを分析する通時的なアプローチとある時代の漢語を分析する共時的なアプローチがある。本稿では共時的なアプローチに従って、現代の漢語を分析した。先行研究では藤堂(藤堂明保、『漢語と日本語』、秀英出版、昭和56、62-65頁)と林(林四郎『漢字・語彙・文章の研究へ』、明治書院、1987、87-88頁)の分析があるが、本稿では漢語を意味論の立場から分析した。

3. 漢語の意味分析

漢語を意味上、以下の四つに分類した。

① 品詞レベルによる分析

- ② 統語レベルによる分析
- ③ 単漢字の意味と漢字の組み合わせからの分析
- ④ 漢語を構成している漢字相互の意味からの分析

(1)と(2)は構造上の分析で、(3)と(4)は意味上の分析である。意味上の分析にはまづ構造上の分析は不可欠である。

3.1 構造上の分析

3.1.1. 品詞レベルによる分析

漢語の品詞の組み合わせには以下のような可能性がある。

- a. 名詞 + 形容詞 例) 民 + 主
- b. 動詞 + 形容詞 例) 困 + 難
- c. 名詞 + 動詞 例) 地 + 震
- d. 動詞 + 名詞 例) 読 + 者
- e. 形容詞 + 動詞 例) 難 + 読
- f. 動詞 + 動詞 例) 暴 + 走
- g. 副詞 + 動詞 例) 全 + 壊
- h. 形容詞 + 名詞 例) 良 + 案
- i. 動詞 + 名詞 例) 製 + 品
- j. 名詞 + 名詞 例) 茶 + 道
- k. 形容詞 + 形容詞 例) 長 + 短

3.1.2. 統語レベルによる分析

漢語は統語的な関係を持つ複合語であり、意味の上から見れば一つの文と同じである。要するに、漢語は意味を持つ単文であり、話し言葉に言い換えることができる。このように考えると漢語は節や文として分析が可能であろう。このことを考慮し、以下のように分類した。

- a. 主語・述語の関係
- b. 述語・目的語の関係
- c. 対等の関係 (並列)
- d. 補助の関係 (補充)

- e. 属格と所有格の関係
- f. 場所と動作の関係
- g. 動作の目的の関係
- h. 原因・理由の関係
- i. 利益・目的の関係
- j. 譲歩の関係
- k. 資格の関係
- l. 程度の関係
- m. 条件の関係
- n. 状態の関係
- o. 時間の関係
- p. 受身の関係
- q. 修飾の関係
 - 連用修飾の文節
 - 連体修飾の文節
- r. 外来語からできた漢語
- s. 虚字と実字でできている漢語
- t. 略文からできた漢語

次に上記の具体的な例を示す。

1) 主語・述語の関係

例) 地震 (地が震える : 地 + 震 → 名詞 + 動詞)

名詞が動詞する : a. 名詞 + 動詞 → 日没、地震

b. 動詞 + 名詞 → 開花

名詞が形容詞 : a. 名詞 + 形容詞 → 頭痛、胃弱

b. 形容詞 + 名詞 → 無力、強力

2) 述語・目的語の関係

例) 出国 (国を出る : 出 + 国 → 動詞 + 名詞)

名詞を動詞する : a. 名詞 + 動詞 → 草食、肉食

b. 動詞 + 名詞 → 犯罪、造船

3) 対等の関係

例) 男女 (男と女 : 男+女 → 名詞 + 名詞)

名詞1と名詞2 : a. 反対の意味 : 名詞1+名詞2 → 天地、左右

b. 同じ意味 : 名詞1+名詞2 → 状態、倉庫

c. 同じ漢字 : 名詞1+名詞1 → 人人、数数

動詞1と動詞2 : d. 反対の意味 : 動詞1+動詞2 → 開閉、売買

e. 同じ意味 : 動詞1+動詞2 → 申請、学習

f. 違う意味 : 動詞1+動詞2 → 引用 (引き用いる)

名詞と動詞 : g. 同じ意味 : 名詞+動詞 → 上昇、下降

4) 補助の関係

例) 不正、未知、非常、可笑、可口、美的、無用

a. 否定の意味 : 接頭辞+他品詞 → 不正、未知、無用、非常

b. 使役の意味 : 接頭辞+他品詞 → 可笑

c. 修飾の意味 : 他品詞+接尾辞 → 美的、油性、当然

5) 属格と所有格

例) 海岸 (海の岸 : 海+岸 → 名詞 +名詞)

名詞1の名詞2 : 海岸、山頂、茶道

6) 場所と動作の関係

例) 登山 (山に登る : 登+山 → 動詞 +名詞)

名詞に動詞する : 動詞+名詞 → 登山、潜水、上京

7) 動作の目的の関係

例) 他言 (他人に言う : 他+言 → 名詞+動詞)

名詞に動詞する : 名詞+動詞 → 他言

8) 原因・理由の関係

例) 苦寒 (寒さで苦しむ、寒くて苦しむ : 苦+寒 → 動詞+形容詞)

a. 形容詞によって(のため) 動詞する : 動詞+形容詞 → 苦寒

b. 名詞によって(のため) 動詞する : 名詞+動詞 → 酒酔 (酒で酔う)

c. 動詞によって(のため) 動詞する : 動詞1+動詞2 → 見学 (見て学ぶ)

d. 名詞によって(のため)の名詞 : 名詞1+名詞2 → 水害 (水による害)

e. 動詞によって(のため)の名詞 : 動詞+名詞 → 飲禍 (酒を飲んだた)

9) 利益・目的の関係

例) 旅館 (旅のための館 : 旅 + 館 → 名詞 + 名詞)

a. 名詞のための名詞 : 名詞 1 + 名詞 2 : 旅館

b. 動詞のための名詞 : 動詞 + 名詞 : 読本 (読むための本)

10) 譲歩の関係

例) 苦学 (苦しみながら学ぶ : 苦 + 学 → 動詞 + 動詞)

動詞しながら動詞する : 動詞 + 動詞 → 苦学

11) 資格の関係

例) 敵視 (敵としてみなす : 敵 + 視 → 名詞 + 動詞)

名詞として動詞する : 名詞 + 動詞 → 敵視

12) 程度の関係

例) 死闘 (死ぬほどまで戦う : 死 + 闘 → 動詞 + 動詞)

a. 動詞するほどまで動詞する : 動詞 + 動詞 → 死闘

b. 動詞するほどまで名詞 : 動詞 + 名詞 → 死友 (死ぬほどまでの友)

13) 条件の関係

例) 触塗 (触ると塗る = 汚れる : 触 + 塗 → 動詞 + 動詞)

動詞すると動詞する : 動詞 + 動詞 → 触塗

14) 状態の関係

例) 死物 (死んでいる物 : 死 + 物 → 動詞 + 名詞)

動詞している名詞 : 動詞 + 名詞 → 死物、生物

15) 時間の関係

例) 夜中 (夜のうち : 夜中 → 名詞 + (時間) 名詞)

名詞の (時間) 名詞 : 名詞 + (時間) 名詞 → 夜中、昼間、午前

16) 受身の関係

例) 廃屋、棄妻、好物 (好まれる物 : 好物 → 動詞 + 名詞)

動詞される名詞 : 動詞 + 名詞 → 好物、廃屋、棄妻

17) 修飾の関係 (被修飾+修飾)

a. 連用修飾の文節

a1. 形容詞 (く) 動詞する : 形容詞+動詞 → 激動 (激しく動く)
(副詞+動詞)

a2. 形容詞 (く) 形容詞 : 形容詞+形容詞 → 甚大 (はなはだしく大きい)

(副詞+形容詞)

b. 連体修飾の文節

b1. 形容詞 (い) 名詞 : 形容詞+名詞 → 重罪 (重い罪)

b2. 動詞する名詞 : 動詞+名詞 → 来客 (来る・来た客)

b3. 名詞 (である) 名詞 : 名詞+名詞 → 客人 (客である人)

18) 外来語からできた漢語

例) 煙草、阿片 (色々)

19) 虚字と実字でできている漢語

例) 所有、将来 (虚字+実字)

20) 略文からできた漢語

例) 経済 (「経世済民」、絶対 (絶 (全く) 相対がない)、京大 (京都大学)
(色々)

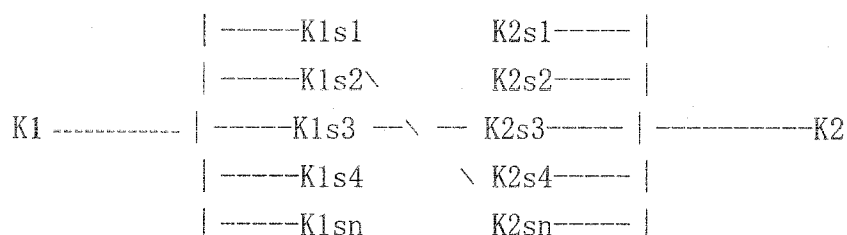
3.2. 意味上の分析

漢字が2字組み合わせられて、一つの意味を表す漢語を成す。漢語を構成している漢字相互の関係にはいろいろなパターンがある。漢語の総括的な意味は二つの条件による。一つは構成する単漢字の意味、もう一つは組み合わせられた2字の意味である。言い替えれば、絶対的な意味と相対的な意味の両方が共存するわけである。次にこの二つの意味の相互作用について述べる。単漢字の意味と漢字の組み合わせによる分析、漢語の構成要素と総括的な意味の関係による分析に分けた。

3.2.1 単漢字の意味と漢字の組み合わせからの分析

漢字には複数の音読みと訓読みが存在し、意味の分野が広い。それぞれの意味は必ずしも似ているわけではないので、漢語の意味を分析するときには、まず構成する漢字の個別的な意味から分析する必要がある。もちろん、これはただ一般的なアプローチに過ぎないので、これだけで漢語の意味がわかるわけではない。

抽象的な例をあげる。漢字 1 (K1) と漢字 2 (K2) があるとすると、K1s1 (漢字の意味 1) から K1sn (同じ漢字の意味 n) まで、K2s1 から K2sn までの異なる意味が存在することになる。K1+K2 という漢語は論理的には数多くの組み合わせができる。したがって、K1 + K2 という漢語が実際に存在するとしたら、数多くの組み合わせの中のどれにあてはまるかによって意味が違ってくるのである。



たとえば K1+ K2 → K1s2 + K2s4 または K1+ K2 → K1s3 + K2s3 などが考えられる。

具体的な例をあげてみよう。

1. 認識
2. 容認
3. 面識

1. 認識
認

- 1・{動}みとめる。じわじわと見さだめる。何ものであるかを見わける。じわりと心にやきつける。
 - 2・{動}みとめる。手間をかけたすえ、よかろうと納得する。
 - 3・{動}〔俗〕じわじわと手間をかけておぼえている。人や文字をおぼえている。
- 〔国〕
- 1・したためる。処置して整える。したくする。
 - 2・したためる。食事をととのえて食べる。また、用具をととのえて手紙な

どを書く。

識

- ① 1・{動}しる。特色によってそれと見わけける。また、他と区別して物や人の名称をしる。
- 2・{名}物事の是非，善悪の見わけ方。判別のしかた。また、それをつかさどる心の能力。
- 3・{名}しりあい。
- 4・{名}〔仏〕精神が対象を認識する作用。十二因縁の一つ。前世の生の煩悩を因として、現在の生に託する人生の意識。
- ② 1・{動}しるす。書きとめる。
- 2・{名}しるし。目じるしや旗じるしのこと。
- 3・{名}銅器や石碑に、平面より高く刻みしるした文字。

➡ 認識：認1 + 識①1：物事をはっきりと理解し、他のものと区別したり、判断したりすること。また、そうして得られた心的な内容。

認1：1・{動}みとめる。じわじわと見さだめる。何ものであるかを見わけける。じわりと心にやきつける。

識①1：{動}しる。特色によってそれと見わけける。また、他と区別して物や人の名称をしる。

2. 容認

容

- 1・{動}いれる。中に物をいれる。また、とりこむ。
- 2・{名}中身。中にはいつているもの。またその量。
- 3・{名}かたち。すがた。わくの中におさまった全体のようなす。かつこう。
- 4・{動}かたちづくる。すがたを整える。また、化粧する。
- 5・{動}ゆるす。いれる。ゆるす。また、ききいれる。受けいれる。
- 6・{形}ゆとりがあるさま。

➡ 容認：容5 + 認2：その事柄をよいとして許し認めること。

容5：{動}ゆるす。いれる。ゆるす。また、ききいれる。受けいれる。

認2：{動}みとめる。手間をかけたすえ、よかろうと納得する。

3. 面識

面

- 1・{名}おも。おもて。まわりを線でぐるりととりまいた顔。また、顔に似せたもの。
- 2・{名}おもて。まわりを線でかぎった平らな広さ。物体の外側。数学では、厚さのない広がり。
- 3・{動}かおを向ける。ある方角を向く。
- 4・{動}そむく。うしろを向く。かおをそむける。
- 5・{名}がわ。むき。方向。
- 6・{単位}平面をなす物を数える単位。
- 7・{名}〔俗〕小麦粉を練って細く長く切ったもの。うどんやそば。
〔国〕めん。(イ)仮面。「能面」「お面」(ロ)剣道で用いる、顔をおおう道具。またその道具の上部を打ちすえること。

⇒ 面識：面1 + 識①1：互いに顔見知りであること

面1：{名}おも。おもて。まわりを線でぐるりととりまいた顔。また、顔に似せたもの。

識①1：{動}しる。特色によってそれと見わかる。また、他と区別して物や人の名称をしる。

3.2.2 漢語を構成している漢字相互の意味からの分析

漢字の組み合わせにより、漢語の総括的な意味は違ってくる。大きく二つのタイプに分けられる。

- 1) 同じ意味の漢字の組み合わせ (x. x)
- 2) 違う意味の漢字の組み合わせ (x. y)

組み合わせには以下の六つの可能性がある。

1. $x. y > x+y$;
2. $x. x > x$;

4. $x.y > x+\alpha$;

5. $x.y > y+\alpha$;

6. $x.y > z^1$

1. は違う意味の漢字の組み合わせで、総括的な意味は第一プラス第二の漢字の意味。例) 旅館、病人。

2. は同じ意味の漢字の組み合わせで、総括的な意味は第一と第二の漢字の表している意味。例) 上昇、身体、森林、集団

3. は同じ意味の漢字の組み合わせで、総括的な意味は単漢字の意味プラス別の意味(α)。例) 超越、義理、言語、尊厳、高貴、優美、高雅、寛大、優秀

4. は違う意味の漢字の組み合わせで、総括的な意味は第一の漢字の意味プラス別の意味(α)。例) 安心、人物、人口、確乎、公然、調子、笑殺

5. は違う意味の漢字の組み合わせで、総括的な意味は第二の漢字の意味プラス別の意味(α)。例) 為替、所有、将迎、所見

6. は違う意味の漢字の組み合わせで、総括的な意味は組み合わた漢字の意味と関係ない。例) 白痴、案内、折角、挨拶、矛盾、煙草、阿片

3.2.2.1 コメント

1) $x.y > x+y$

この漢語の種類は圧倒的に多い。2から6のパターン以外はすべてこの型に当てはまる。従って、 $x.y > x+y$ のパターンは普通といってもよいであろう。

2) $x.x > x$

このパターンは「対等の関係の漢語」の同じ意味の漢字に当てはまる。

¹ 林四郎氏(「日本語2字漢語の意味核」、『応用言語学講座』、林四郎編、明治書院第5巻、1992年)は:漢語を「1核2の字漢語」、「2核2の字漢語」、「1核半の2字漢語」、「癒着がもたらす1核語」、に分ける。(注:「核」とは漢語の意味の核である)。

- a) 同じ意味 : 名詞1+名詞2 → 状態、倉庫
- b) 同じ意味 : 動詞1+動詞2 → 申請、学習
- c) 同じ意味 : 名詞+動詞 → 上昇、下降
- d) 同じ漢字 : 名詞1+名詞1 → 人人、数数

3) $x.x > x+\alpha$

2) $x.x > x$ との違いは両方の漢字が示している同じ意味のほかに $+\alpha$ があり、全体の意味は大體、物質的より抽象的なニュアンスを取るケースが多い。

例1) 寛大 → 寛 : 広い、くつろぐ、許す
大 : 大きい

→ 心がひろく、思いやりのある態度で接すること (心が広い、心が大きい → $\alpha = \text{心}$)

例2) 超越 → 超 : こえる
越 : こえる

→ ある限界・範囲をはるかにこえること。また、ある物事からぬけ出て、全く別のより高い立場にあること ($\alpha = \text{はるかに、高い立場に}$)

4) $x.y > x+\alpha$;

この型の漢語は

1. 「虚字と実字できている漢語」に当てはまる (最初の漢字は実字である) ;
例) 確乎、公然
2. その他 例) 人物、人口、調子、笑殺

5) $x.y > y+\alpha$;

4. 1.) とほぼ同じであるが、最初の漢字は虚字である。

例 : 為替、所有、将迎、所見

6) $x.y > z$

このパターンは二種類ある。

a. 「外来語からできた漢語」

例) 煙草、阿片

b. 「略文からできた漢語」

例) 經濟 (「経世済民」、絶対 (絶 (全く) 相対がない)、京大 (京都大学)

3.3. 漢語の分析の実例

以上述べてきた漢語の論理的な分析を考慮に入れながら、実際に「漢語」を分析してみた。

意味：「昔、中国語からはいって日本語となったもので、音読する語。また、それにならって日本で作った語のうち、字音で読むもの。」

次のような順序で分析した。

- ① 品詞レベルによる分析
- ② 統語レベルによる分析
- ③ 単漢字の意味と漢字の組み合わせからの分析
- ④ 漢語を構成している漢字相互の意味からの分析

(1) 品詞レベルによる分析

漢語 → 漢（名） + 語（名）：名＋名

(2) 統語レベルによる分析

漢語 → 漢（名） + 語（名）：名＋名 （漢の語）名1の名2
→ 属格と所有格

(3) 単漢字の意味と漢字の組み合わせからの分析

漢：

1. {名}川名、漢水
2. {名}天の川。
3. {名}王朝名。
4. {名}外国人の中国に対する呼び名。
5. {名}民族の名。中国人を構成する主な民族。
6. {名}中国または、中国人を呼ぶときの自称。
7. {名}男、男に対する呼び名。
8. [国] から、あや、中国のこと。

語：

1. {動}いう。ことばをはっきりと発音していう。ものをいう。

2. {名}こと。ことば。口に出していうことば。また、口に出していうこと。
3. {単位}ことばや文字の数を数えるときのことば。
4. {代, 助}われ。ここに。
5. 「言言」とは、かどばっていかめしいさま。

〔国〕げん。ソシユールの言語学で、言語(ラング)に対して、話し手が個人的な感情、思想を表現する実際の発話をいう。パロールに対する訳語。

漢語：漢 8 + 語 2

漢 8：〔国〕から、あや、中国のこと。 + 語 2：{名}こと。ことば = 中国のことば。(中国「から入った」のことば)

(4) 漢語を構成している漢字相互の意味からの分析

漢語 → 漢の語：名 1 の名 2 → $x, y > x+y$

4. 特殊な漢語

最後に、二つの特殊なパターンの漢語を取り上げる。一つは漢語を構成する漢字は同じでも位置を変えたもの(「鏡面漢語」)。もう一つは漢語は同じであるが発音と意味の異なるもの(「二重の漢語」)。

(1) 鏡面漢語

日本語の漢語の中で「鏡面漢語」の数は意外に多い。一例をあげると次のような漢語がある：重体・体重、内部・部内、防水・水防、変改・改変、物品・品物、転回・回転、平和・和平、現実・実現、など。

上記の漢語はさらに次の三つの種類に分けられる。

- a. 同じ意味の鏡面漢語 例) 変改・改変、転回・回転
- b. 違う意味の鏡面漢語 例) 重体・体重、内部・部内
- c. ニュアンス、使い方が違う鏡面漢語 例) 平和・和平、実現・現実、物品・品物

同じような意味の漢字を並べた漢語は「同じ意味の鏡面漢語」をつくる傾向が強いのに対し、違う意味の漢字を並べた漢語は b. の傾向が強いことがわかる。

c. の場合は似たような意味の漢字で構成されている漢語が多い。

また、a. の場合は上記に述べた $x.x > x$ 、すなわち 2) の「対等の関係の漢語」の同じような意味の漢字を並べた漢語に当てはまる。b. はいろいろなパターンがある。c. の場合は $x.x > x \Leftrightarrow x.x > x+\alpha$ の関係を持つ。たとえば、

1. 物品：「不動産をのぞく、形のある物。動産」 = $x.x > x$
2. 品物：「特に、商品としての物品」 = $x.x > x+\alpha$ (α : 商)

(2) 二重の漢語

「二重の漢語」は読みが違う同じ構成要素からなる漢語で、読み方により意味も違ってくる。このタイプの漢語は少ないが、分析する上で非常におもしろい。

1. 末期：まつき＝おわりの時期；
2. 末期：まつご＝一生の終わりの時。死にぎわ。臨終。

(1) 品詞レベルによる分析

末期：まつき → 末(名) + 期(名) = 名+名
末期：まつご → 末(名) + 期(名) = 名+名

(2) 統語レベルによる分析

末期：まつき → 末(名) + 期(名) = 名+名 (末の期)
末期：まつご → 末(名) + 期(名) = 名+名 (末の期)
どちらも：名1の名2 → 属格と所有格

(3) 単漢字の意味と語構成からの分析

末：

1. {名}すえ。こずえ。また、はしの部分。
2. {名}すえ。物事のたいせつでない部分。
3. {名}すえ。ある期間のさいごの時期。また、のちの衰えた時代。
4. {名}すえ。ある序列のさいごの地位。
5. {名}すえ。商、工業のこと。
6. {名, 形}こまかいこと。物事が小さくこまかい。
7. {動}小さくする。〈同義語〉
8. {形}小さい者の意で、自分を謙そんしていることば。
9. {名}中国の芝居の男役。

10. {動}ない(ナシ)。

期：

1. {名}とりきめた日時。また、一定の時間。
2. キス{動}まつ。予定する。また、必ずそうなる目当てをつける。
3. キス{動}あう。一定の時と所をきめ約束してあう。ちぎる。
4. {名}一か月、または一年のこと。
5. {名}一年を期限として喪に服すること。
6. 一生の最後。

末期：まつき → 末3+期1：末の時期

末期：まつご → 末3+期6：末の一生

(4) 漢語を構成している漢字相互の意味からの分析

末期：まつき → 末の期：名1の名2 → $x, y > x+y$

末期：まつご → 末の期：名1の名2 → $x, y > x+y$

このように全く同じ構造の漢語であるが、意味レベルで差が現れるのである。
このほかに次のような漢語がある。

一見(いちげん)・一見(いっけん)、追従(ついしょう)・追従(ついじょう)、
身上(しんしょう)・身上(しんじょう)、心中(しんちゅう)・心中(しんじゅう)、
身代(しんだい)・身代(ものしろ)、などが存在する。

5. まとめ

漢語の分析には、形態論上のアプローチ、音声学的なアプローチ、構造的なアプローチなどいろいろある。本稿では、意味論の立場から見た漢語の分析を試みた。意味論上のアプローチは特に日本語の語彙指導に重要な役割を果たしているからである。漢語の意味分析が漢語の習得や理解に有効であることはよく知られている。そのために、漢語の分析を4つの段階に分けた。

最初の二つの段階は漢語の構造に関わるものである。

- ① は品詞レベルによる分析で、次のステップを踏むには不可欠である。統語レベルによる分析は品詞の相互的な関係を明らかにするからである。
- ② 統語レベルによる分析は、意味論上の分析を土台にした。漢語の構造が理解できなければ、その漢語の意味はわからないであろう。

次の二つの段階は本格的な意味論上の分析である。

③ 漢語の要素の個別的な意味論上の分析。

④ 個別的な要素の組み合わせの総括的な意味論上の分析である。

このように、まず品詞レベルから、品詞の組み合わせの統語、単文としての漢語の理解というふうに分段階をおって分析する。そして、漢語の構造がわかったら、漢語の要素、すなわち、単漢字の個別的な意味の分析に進む。最後に、その組み合わせ、すなわち、漢語の最終的な意味論上の分析を行う。

漢語は言語上、単文と同じ資格を持ち、複雑な構造を示すので、多面的なアプローチの分析が必要とされる。

参考文献

1. 「和語・漢語」「ことば」シリーズ8、文化庁、1978年
2. 藤堂明保、「漢語と日本語」、秀英出版、1981年
3. 陳力衛、「和製漢語成立の基礎—副詞による連用修飾の語構成件」、森岡健二、金田弘など『日本近代語研究』2、51-71頁、ひつじ書房、1995。
4. 田中祝生、「日本語の世界第4巻」、『日本の漢字』、中央公論社、1982年
5. 林四郎氏、「漢字・語彙・文章の研究へ」、明治書院、1987年
6. 林四郎、「日本語2字漢語の意味核」、『応用言語学講座』、林四郎編、明治書院第5巻、1992年
7. 林四郎、「2字1核語各字の意味のにじみについて」、明海大学外国語学部論集、第8集、1995年度、1996年3月刊
8. Lua K.T., "A Study of Chinese Word Semantics", in: *Computer Procession of Chinese and Oriental Languages*, vol. 7, n.1, June 1993, pp. 37-60.
9. 加納千恵子、「初級漢字の品詞性と造語力」、『日本語教育論集』第14号、筑波大学留学生センター、1999年、45-79頁
10. 野村雅昭、「語彙調査データによる基本漢語の抽出」、『早稲田大学日本語研究教育センター紀要12』、1999年、5月、21-54頁